

「読解指導論—琴線にふれる国語教育—」

「読むことの指導とはどうすることなのか」という問いは、わたしたちが授業をするにあたってたえず持ちつづけている問いである。

この問いは、さらに、「読むとはどういうことなのか」という根本の問いを導く。これらの問いに自分なりの見解をしておかないと授業は不安定になる。

本書は、このような問いに真正面から答えようとされたものである。ここには、野地潤家先生がこの一〇年間に書きしるされた読解指導関係のつぎのような内容の二七編の論考が収められている。いずれも「読むこと」について深く鋭い考察をすすめられたものばかりである。

Ⅰ 読解指導の原理と方法

- 一 文章の読解過程における思考訓練
- 二 形象理論に立つ指導過程
- 三 読解指導過程の検討
- 四 国語科学習指導過程の樹立のため
- 五 斉読の意義とその指導
- 六 説明的文章指導上の問題点

七 文章の種類に応じた読解の指導

八 本質的関連とそとのための基本条件

九 国語科教科書の改善

一〇 創造者・開拓者としての人間像

一一 教材研究上の問題点とその改造

一二 国語科教材研究への提言

一三 解釈行為（生活）をどのように確立するか

一四 古典学習を深めるために

一五 教材としての漱石

一六 抒情教材のこと

一七 板書の現代化

Ⅲ 読解指導の基盤と演練

一八 導入指導と子どもの学力差の問題

一九 態度指導の評価

二〇 単元学習の進展のために

二一 国語教育実践の基本問題

二二 国語教育の一筋を求めて

二三 国語学習・指導の基底にあるもの

二四 心情をゆたかにする国語教育

二五 琴線にふれる国語教育を

二六 子どもをひきつける授業

二七 授業の深奥

（紙幅のつごうで副題は省略）

本書には、三十有余年にわたる国語教育探究ひとすじの歩みの結実として生まれた、先生の透徹したお考えがしるされている。

たとえば、「読書行為は、言語による表現世界への読むことによるアプローチであって、その接近・探究の過程は、解釈・鑑賞・批評・理會そのものと言える。」と定義されていることなどである。

伝記指導のあり方、説明的文章指導の本質についてなど、わたしたちが実際に行きあたった問題をもって読むときらりと光ったものを与えてくれる。実践しつつ、折にふれて読み解き、じっくりと味わいたい書物である。なお、本書は野地潤家先生著『国語教育研究叢書全六巻』の一冊である。『国語教育原論』につづいて、他の巻も読ませていただけるのを心待ちにしている。

（昭和48・10・20、共文社刊、A5判二三八

ページ、一九〇〇円）

（一九七四・七・一七）（浜本純逸）